

教育遭対部より

冬山連絡会開かれる

30人が参加。凍傷予防の方法など

教育遭対部事務局・疋田吉継

恒例の冬山連絡会が、12月22日午後7時30分から、大阪市福島区の労山事務所とリモート（Zoom）の併用で行われ、30人が参加。今回は大阪近郊の山も含めた「冬山の気象の特徴と注意点」の話のほか、「冬山の事故事例と注意点」として凍傷や低体温症の予防策などの話があり、ツェルトの有効的な使用方法の実演などもあった。

近畿の冬山の気象特徴は

初めに H.C. teruru の高田和孝さんが「冬山の気象と注意点（近郊の山の気象の特徴も）」について話した。高田さんはまず、西高東低の典型的な冬の気圧配置によって日本海側で雪が降る仕組みを説明。さらに冬の3つの特徴的な気象パターンを解説した。

まずは南岸低気圧。東シナ海あたりに発達した低気圧が、日本の南岸（太平洋側）を東北東～北東に通過する。この時に大陸などから寒気が南下している場合は太平洋側の標高の低い山でも積雪となり、関西の山で大雪となることがあるので注意が必要である。

次に、日本海低気圧。低気圧の中心が日本海の北部にあり、日本海を東進し日本列島を横切る。低気圧が接近すると、その南側で南～南西の風が強く吹き、気温が上昇。まとまった雨や湿った雪が降り、雪崩や雪庇の崩

壊、融雪洪水などの災害が発生しやすい。低気圧が東に通過後は冬型の気圧配置になり、一転して強い寒気が入ってくる。

続いて二つ玉低気圧。低気圧が日本海側と太平洋側にあり、日本の広い範囲で悪天候となる。寒気が強い時によくある気圧配置。低気圧と低気圧の間に挟まれた部分は相対的に高気圧になるので天気が良いが、これは一時的（疑似晴天）なもので、すぐに天気が悪化する。このパターンの時に遭難が起こりやすい。この低気圧が東海上に抜けると強い冬型の気圧配置となり、日本海側で悪天候になる。

気象サイトの紹介

▼ HBC 北海道放送 専門天気図

<http://www.hbc.co.jp/weather/pro-weather.html>

▼ お天気.com 天気図 1週間～11日間

https://www.otenki.com/0001_chart.htm

▼windy <https://www.windy.com/ja/>

▼吉田産業海洋気象事業部 <http://www1.ystenki.jp/>

・ 天気予報は最新であればあるほど精度が上がります。可能な限り最新の情報で確認しましょう。 ・ 天気予報の精度は年々向上しています。気象情報の精度がよくなかった時代、気象遭難は予測できない気象の急変が原因。気象情報の精度がよい現在、気象遭難は人為的な要因が大きい。予報精度向上による恩恵を、無理をする方に使わず、安全を確保するために活用しましょう。

引き続き、関西の山の気象の特徴を説明。近畿地方の日本海側には、日本海からの雪雲を防ぐような標高の高い山がなく、雪雲が近畿北部から近畿中部や東海に流れてくる。特に琵琶湖周辺ではさえぎる山がなく伊吹山や

鈴鹿山地では雪が降りやすい。

六甲山や金剛山は標高もあまり高くないので、街の天気予報がだいたい使えるが、冬型で寒気が入ってきた時は、街は晴れていても山は霧で雪が降ることがある。南岸低気圧により多くの雪が降ることもある。雪による遭難はあまりないが、道がよく踏み固められているのでスリップによる転倒事故などが多い。

比良山など近畿北部の山は日本海側の気候に近く、冬型の気圧配置の時には山の上部では吹雪となり、雪がたくさん降る。また厳冬期でも、日本海低気圧が通過する時には山の上で雨が降ることがある。

伊吹山や鈴鹿山系は、日本海側と太平洋側の双方の気象の影響を受ける。冬型の気圧配置の時は、上部では吹雪となる。北東風が吹くときは、比較的天気がいい。

大峰山や大台山脈は標高があるので、強い寒気が入ってきた時には上部では吹雪となる。山が荒れる程度は寒気の強さと概ね比例する。南岸低気圧が近づくと早く天気が崩れ、日本海低気圧が通過する時には雨が降ることがある。

最後に、「冬場（12月～3月）、500hpaの高層天気図で、-36度以下ならドカ雪、-30度以下なら大雪。この目安を覚えておいてください」と強調した。

ツェルトの有効な使い方を解説

続いてOWCCの中川さんが「冬山の事故事例と注意点」について話した。

中川さんは、大阪労山が昨年春に出版した事故事例集「事故防止は仲間の知恵で」から、過去の大阪労山の冬山での事故を例に挙げた。

金剛山の下山中、雪がないのでアイゼンを外した。しかし再び凍った道に出て、アイゼンを着けなおさずに歩いていて転倒、骨折した。冬の八ヶ岳で、汗をかいたが目出し帽は脱がずに歩行。稜線で急に低温・強風になり、目出し帽が顔に張り付くが、そのまま行動。顔に凍傷を負った一ー一などの例をツリー解析を使いながら具体的に紹介し、参加者とともに事

故の対応策を話し合った。

さらに、冬山の事故防止について、自身の体験から防止策を披露した。

手や足が、寒さで痛くなってきたら危険のサイン。手袋をはめていて痛くなった時は、手袋を少しずらし、親指を内側に入れて「ぐう」の形に握って手を温める。足の場合、感覚が戻ったあと靴を脱がないこと。靴を脱ぐと、足が腫れてしまい靴を履けなくなる。下山まで夜も靴を脱がないまま下山する。とにかく痛くなったらリーダーに申告すること。

顔の場合は、皮膚が白っぽくなって蠟人形のようになってきたら危険。この時は素手でゆっくりと顔を押さえて温めること。顔を手で強く押ししたり揉んだり、叩いたりすると凍結した毛細血管がパキパキ折れて凍傷が悪化するのでダメ。顔は自分では変化に気づきにくいので、パーティーがお互いに顔を見合って変化に気づく必要がある。

冬山で、写真を撮ろうとして脱いだ手袋を風で飛ばされたり、テント撤収時に手袋を飛ばされたりして凍傷になった仲間もいる。手袋やオーバー手袋が風で飛ばされないように、手袋にゴムを付けて、そのゴムを腕に通して、脱いでも飛ばされないようにすることを推奨した。もし手袋を飛ばされたら、スーパーの袋や小物入れのナイロン袋、靴下のスぺアなどを手袋代わりにして暴風・防寒対策をするように勧めた。



手袋には片手ずつゴムを

ツェルトも風に飛ばされる恐れがあるので、細引きでザックや身体とつないでおく。ツェルトを被り、ザックを座布団代わりにして座る。この時、荷物が出しやすいようにザックの上部の入り口を自分の股の間の方に向

ける。そしてツェルトの下部生地をお尻の下に敷く。

三人以上のパーティーなら、リーダーともう一人がツェルトの両端に座り、背筋を伸ばして頭をポール代わりにする。寒さや低体温症などで弱ったメンバーを左端か右端に座らせ、中央でコンロの火をたく。濡れた衣類などは脱がせて、素肌に直接ダウンなどを着させる。

「『私はそういう危険な山には行きません』という仲間がいますが、山というのは常に危険と隣り合わせで、いつ自分たちが危険な状態に陥るかわからない(悪天の前にと頂上を目指したが事故で動けず悪天につかまるなど)。他人事と思わず、明日は我が身と思って、事故事例に学んで対策を勉強してほしい」と力を込め、「より詳しい内容は、山の教室の『遭難事例研究』に出席して勉強してください」と話した。

